私の戦争体験記

其田　清

一九三一年（昭6）に小学校入学以来、大学中途で学徒出陣、一九四五年（昭20）の終戦までの十五年戦争は、私の学校生活の全てであり、まさに戦争の申し子みたいに一九二四年（大13）に生を享けた私の戦争体験にペンを走らせてみる。

戦争が背景にあったので、幼年期、少年期、青年期は全て戦争一色に彩られていた。暗い灰色の時代などと伝えられているが、国全体がそのような空気の中にあったのだし、私共は決して「暗い」「つらい」「苦しい」等とは毛頭思っていなかった。

小学校入学の年に満州事変がおきた。この頃の遊びは殆ど戦争ごっこであった。

中学校入学が日中戦争勃発（ぼっぱつ）の年に当る。学内では葡萄（ぶどう）が奨励され、軍事教練が強化され、最終学年時には夜間戦闘の訓練まで受けていた。二、三年の頃、夏の甲子園球場で野球観戦中のこと、回の入替時場内放送で「〇〇さん至急お宅へお帰り下さい。軍務公用でございます」軍隊への召集の知らせである。観客全員が万雷の拍手でこれを送る。兵役を一旦終え予備役として社会で働いている大人を必要に応じて軍は召集して行った。この召集令状が赤色をしていたので、世間一般で「赤紙」と呼んでいた。この召集を受けた者の職場、町内では目出度い事として盛大に送り出していた。

一九四一年（昭和16）日米開戦、中学校最上級学年の時である。東南アジアに戦線は拡大して行くが当初の勢いは次第に衰え、苦戦の容相が、きびしい報道管制の中から伝わってくる。私は既に進学していたが、進学の年、学生に与えられていた卒業までの徴兵猶予措置が文科系学生に対し打切られ、兵役に就くよう命じられた。時に一九四三年（昭18）、世に謂（い）う学徒出陣である。出陣学徒第一陣の先輩方々を送った私共には通年勤労動員が待ち構えていた。川西航空機会社、淡路島での陸軍飛行機場建設作業、住友鋼管等、